

みんなと笑おうよ

苦しむ人減らしたい

キャンパスで留学生たちと言葉を交わす太田初子さん（中央）
—東京都豊島区の東京福祉大で6日、藤井太郎撮影

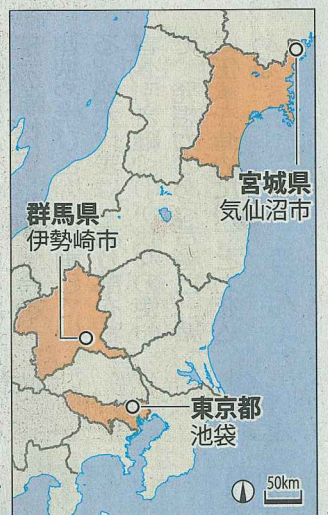


宮城県気仙沼市で東日本大震災の津波にのまれながらも救出された太田初子さん（73）は、大学院で高齢者の生きがいテーマに研究している。避難先の仮設住宅には泣いている人や引きこもる人がいた。苦しむ人を減らしたいと、通っていた定時制高校を卒業し、大学、大学院と進んだ。「誰もが気軽に来られるサロンを開きたい」と夢を語る。【山本有紀】

気仙沼で被災 73歳、東京で大学院生に

あの日は1人暮らしのアパートで大きな揺れに襲われた。外に出た瞬間、津波にさらわれた。渦巻く水の中で「卒業証書をもろうまでは死ねない」ともがいた。定時制高校の3年生だったからだ。子どもの時から勉強は好きだった。家計のため高校進学を断念し、群馬県内の電機会社に就職。同県伊勢崎市で暮らしていたが、2007年に夫を亡くした。出身の気仙沼市に戻って間もなく学生募集の広告が目に残り、08年4月に入学した。「分らないことを教わるのが楽しくて」

市職員が投げ入れたロープにつかまり、助かったが、妹夫婦や友人が犠牲になった。「自分だけ助かった」。罪悪感から落ち込む日々が続いた。「おばちゃん、どうしたの?」。避難所ですっきりしていると、8歳の少女から声をかけられた。聞けば、母と妹を津波で亡くしたという。思わず押し黙ると、「おばちゃん、笑ってようね」と励まされた。少女とは以来、会っていないが、その一言に救われた。「苦しむ人を減らすために勉強しなきゃ」。再び机に向かった。震災後の12年春、東京福祉大に合格し、キャンパスがある伊勢崎市の自宅に戻った。



うつ病などの心理療法を学んだ後、16年に東京・池袋にある大学院に進んだ。研究テーマは高齢者が健康に暮らすための地域づくり。週3、4回午前3時に自宅を出て、車と始発電車乗り継いで通学する時期もあった。帰宅は早くて午後10時半。コンピューターの使い方も必死に覚えた。「逆境でもチャレンジすれば、目標を達成できる」と意欲は尽きない。大学時代に被災者支援のサークルを設立し、年に数回、学生を連れて気仙沼市を訪れ、交流会を開いている。大学院修了後は、自宅に誰もが立ち寄れる居場所を作るつもりだ。「行くところがなく、孤独な人は多い。一緒に過ごせば、仲間もでき、いつか笑顔になれる日が来る」と話した。



昨年3月、群馬の友人と気仙沼を訪れ、地元の人たちと交流する太田さん（左端）＝太田さん提供